報告

経済学会春季大会

昭和三十年度の春季大会は六月二十七日午前十時より明徳館二十一番教室に於いて盛大に開催された。

当日は今西教授の司会のもと、松井経済学部長の開会の辞、小松教授の講師紹介にひきつゞき、かねてから本会が招聘を希望していた大日本紡績株式会社取締役社長原吉平氏に「綿業の現在と将来」と題する講演をお願いすることが出来た。小松教授の紹介の言葉にあった如く、典型的な第一線「企業家」として吾が国実業界に重きをなされる同氏から吾が国工業構造の基軸的地位を占め、又日本資本主義の盛衰と運命をともにしてきた日本綿業の歴史と現状に関し生々しい又含蓄深い講演を聴く機会を得たことは本会及び会場を埋めつくした学生のすべてにとり近来にない収穫であった。豊富な史料と細密な統計を自由に駆使して展開された氏の講演内容は到底わづかの紙面で要約し得るものではないので項目のみ掲げる。

一、日本綿業史の概略
二、日本綿業と世界綿業との関係
三、中本経済に占める綿業の地位
四、日本綿業将来の見透し

講演が終って学会を代表して松山教授より深甚より感謝の辞がのべられ聴衆一同の拍手とともに講演会は終った。尚式後懇談会が敬真館会議室で開催され原氏を囲んで大下学長・松井部長はじめ多数の教授が参加して和やかに懇談しまことに意義ある春季大会の幕が閉じられた。

第二十一回経済研究会

五月十七日（火）午後二時半
於経済学部研究室
発表者　入江節次郎専任講師
題「英国労働党の国有化政策の本質に関して」
出席者
松井、中西、住谷、小松、今西、相見、岩根、西川、小野入江、逆井、山本、古米、辻、野間、渡辺

英国産業国有化政策について長年研究して来られた入江専任講師が、本学で、本年五月二十一日から二十三日までの三日間にわたって開催された第十五回日本経済政策学会において、「英国労働党の国有化政策に関する若干の考察」と題されて発表せられるに先立ち、本研究会においても前記テーマのもとに発表をお願いして、第二十一回経済研究会を開催した。経済研究会新主任住谷教授の挨拶に続いて、直ちに入江専任講師の発

究発表が行われた。

氏は英国産業の国有化の代表的産業である石炭産業を中心に労働党治下の五ケ年間の賃銀、価格及び利潤の諸指標の趨勢を辿りつつ、実証的に分析を進め、戦後英国国有化の本質が、現代独占資本主義の経済政策の一形態であることを導かれた。

（なお、詳細は本誌本号九三頁―一〇六頁及び第五巻第四号の同氏の論文を参照されたい。）

発表後、討論に移り、いろいろの面から質問がなされた。主なる質問は、次の通りであった。

先づ小松教授は、一、日本で国有化がやかましく云われながら、何故行われないのか。二、英国保守党内閣下では、国有化政策はどうなっているか、の二点について、また中西教授は、イングランド銀行の国有化と石炭産業の国有化との性格と理解を異にせねばならないのかどうか、と云う国有化の動機についての鋭い質問が出され、さらに松井教授はそれと関連して、入江専任講師の結論に対して、国有化の成立は労働党のイデオロギーと共に経済再建と云う至上命令から行われたのではないか、との意見を出された。

これらの質問をめぐって活潑な議論が交され、現代資本主義経済に於て重要な問題となりつゝある国有化問題について、多大の成果を収めて、成功裡に会を閉じることが出来た。

第六巻　第一号　二月十日発行　定価一〇〇円

論　説

御雇外国人とわが国の経済及経済学……本庄栄治郎

生計費比較基準の問題 (2)……宗藤　圭三
――生計費指数における真指数の理解――

吾国工業構造の形成 (2)……黒松　巌
――第一次大戦を中心とする――

第一次世界大戦直後の英国労働運動瞥見 (1)……入江節次郎

資　料

国民生命表作成について……辻　博
――特に補間法に関して――

紹　介

Papers in Engish Monetary History
ed. by T. S. Ashton & R. S. Sayers
……中西　仁三